第２１回国際ロマンス語学会議（パレルモ、1995年9月18日－24日）報告
XXI Congresso Internazionale di Linguistica e Filologia Romanza (Palermo, 18-24 Settembre 1995)

１９９５年９月１８日から２４日にかけて、パレルモ大学の神学部を会場として第２１回国際ロマンス語（言語・文献）学会が開催された。フランスに本部を置く Société de Linguistique Romane が３年ごとに開催する国際会議であるが、 本大会はパレルモ大学の文学部とシチリア言語研究所（ Giovanni Ruffino 教授ほかのグループ）がその運営事務局として活躍した。参加者はおよそ９００名にも達し、発表申込みも６００件近くあり、そのうち約３００名が口頭発表の機会を与えられたが、 残りの提出された論文も Atti（プロシーディングス）にはすべて収録されるそうである。

ノルマン宮殿における開会式のあと、会議は八つの部門、Ⅰロマンス語の歴史文法、Ⅱロマンス語の形態論・統辞論、Ⅲロマンス語の語彙論・意味論、Ⅳ話しことばの構造、Ⅴ方言学、地理言語学、社会言語学、Ⅵ言語史と地中海文化、Ⅶ中世のテキスト校訂、Ⅷ中世の文化研究に分けられ、午前８時半から午後７時まで２時間半に及ぶ昼休みをはさんで進行した。全体会の方も最終日を除き２部門に分けられ、「音声・形態変化の研究における新・旧資料」、「ロマンス諸語分析における文法範疇」、「新しいＲＥＷは可能か」、「話しことばの構造と口頭談話の多様性」、「言語地理学の原理と方法」、「文献学の方法」、「ロマンス語圏の地中海とシチリア」がテーマとされた。

日本からは、会津洋、阿部宏、大高順雄、小畑明、春木仁孝、矢島猷三、菅田茂昭が参加し、大高：La langue du manuscrit OUL 1 (olim Phillipps 23240) du “Roman de Troie en prose”（Ⅶ部門）、阿部：A propos du comparatif épistémique français（Ⅱ部門）、菅田：Fattori mediterranei negli esiti romanzi? — a proposito del cambiamento C > G in posizione iniziale ecc.（Ⅵ部門）の発表があった。なお、土地柄「再び màfia について」と題して Salvatore C. Trovato は、従来のアラビア語 mahyas 起源説とこれをシチリア方言 malfusso「悪党」との混成とする新説を検討し、この語の性格上文献に現れにくい状況を考慮すればシチリアにおける h > f 地区の存在からも前者の可能性を否定できないとした。

会議の期間中、テッラシーニ市におけるレセプションおよびシチリア民族音楽と踊りの披露、パレルモを一望できるモンレアーレ（ドゥオーモとベネディティーニ修道院で知られる）へのエクスカーション、ブテーラ邸における夕食会（シチリア料理）などに運営本部の心づかいがみられる大会であった。

さいごに、大会の総会において、 Gerold Hilty 教授（チューリッヒ大学）を継ぎ、学会の新会長に Alberto Varvaro 教授（ナポリ大学）が選出されたことを記しておきたい。

菅田　茂昭